

カナダ交換留学経験談

3年4組38番 片岡宇大

Keywords: 「交換留学」「インプット、アウトプット」「教育システムの差」

1、生活面で感じたこと

1. はじめに

私は高校2年時から高校3年時にかけてカナダへ1年間交換留学生として派遣された。グローバル化が迅速に進む世の中で「留学」すること自体がステータスになる世の中から、「留学で何をしたか」「留学後にどうなったか」など、留学をするだけでなく、それを利用して自分の探究に繋げることが大切だと考えた。さらに、大学ではなく高校生の中に世界を知ることが大切だと感じたことがきっかけで留学を決めた。

2. 序論

留学開始当初は、英語を学ぶだけだと軽く考えていたが、実際はそんなに甘く、簡単なものではなく、英語で学び、英語で生活し、英語で友人関係を築くという経験は、思った以上に私に多くのことを教えてくれた。

3. 本論

カナダに到着した時、英語はある程度理解できたものの、ネイティブスピーカーのスピードやアクセントに圧倒され、コミュニケーションがスムーズにできないことにショックを受けた。授業でも、教師が話す内容をすべて理解できないまま進んでしまい、焦りと不安でいっぱいだった。しかし、そのような困難があったからこそ、私は「学ぶとは何か」「言語とは何か」について深く考えるようになった。

英語をただ学ぶという受け身の姿勢ではなく、自ら積極的に学びに行く姿勢を持つことが重要だと気づいたのは、現地での生活を通じてである。英語「を」学ぶのではなく、英語「で」学ぶ。この違いが私にとっての留学の本質を理解させた。英語はただのツールであり、そのツールを使って何を学ぶかが本当の意味での挑戦であった。

さらに、留学中に挑戦したことの一つが、課外活動への参加である。私は学校の野球チームに参加し、最初は言語の壁や文化の違いでチームメイトとの意思疎通がうまくいかないこともあったが、スポーツを通じてお互いに信頼を築くことができた。日本人ということもあり、チームメイトやコーチからはかなり信頼され、チームの大きな戦力として起用され、地区優勝を果たした。この経験からスポーツは人種や言語を飛び越えて共通の感情を共有できる大切なものだと感じた。

4. 結論

私は留学中にもたくさんの刺激を受けたが学びが多かったのは「留学後」である。留学前には当たり前だと思っていた日本の生活や考え方が、カナダでの経験を通じて少し変わったものに見えるようになった。例えば、日本の学校では個人よりも集団の和を重視する場面が多いが、カナダでは個人の意見や自主性が尊重される場面が多かった。この違いを経験したことで、私は自分自身の価値観や考え方について再考する機会を得た。留学は単なる「海外での勉強」ではなく、異なる視点から自分や社会を見つめ直す貴重な体験だと感じた。

2、教育面で感じたこと

1. 序論

教育は、個人の成長だけでなく、社会全体に大きな影響を与える。日本は主に知識の蓄積に重点を置くインプット型の受動的教育を採用している一方で、留学先のカナダでは学生が自ら考え、行動するアウトプット型の能動的教育が主流だった。このような教育方針の違いは、社会の姿勢や行動に顕著に表れ、例えば選挙の投票率などの社会的な参加意識に影響を与えていると考えた。

2. 本論

日本の教育システムは、生徒が吸収する「受動的」なスタイルが主流だと思う。授業ではテストでの点数を重視し、暗記が求められる場面が多い。このアプローチは、学生が知識を効率的に蓄積するために効果的だが、一方で、個々の意見や創造性を発揮する場が限られているという欠点があると感じた。

また、社会においても受動的な姿勢が見られる。例えば、政治参加に関して言えば、日本の若者の選挙投票率は他の先進国に比べて低い傾向にあり、多くの若者が「自分の一票で何かが変わるとは思えない」と感じ、政治的な意思決定に対して無関心の傾向がある。このような傾向は、教育によって「教えられたことを受け取る」姿勢が強調され、自らの意見を表明する機会が限られてきたことに一因があると考えた。

一方で留学先のカナダの教育は授業内でアウトプットに重きを置き「能動的」に学ぶスタイルが主流であった。授業では私たち生徒が自ら調査し、ディスカッションを通じて意見を交換する場面が多かった。学生は、自分の意見を表明し、問題に対して主体的に解決策を見出すように指示される。この教育を通し私は批判的思考力や問題解決能力を高めるだけでなく、自分の意見を積極的に発信するスキルを育てられた。

この教育方針の社会的な影響は、カナダにおける高い投票率にも反映されている。カナダでは、若者も含めた市民が自分の意見を表明する重要性を認識し、選挙に積極的に参加する傾向がある。これは、教育を通じて「自分の意見が重要である」という意識が培われていることと深く関連していると考えた。自ら行動を起こすことの重要性を理解し、その延長線上で政治的な参加が促進されている。

3. 結論

これらを通じて日本の教育方針をより良くするために具体的に何を变えればいいのかについて考えた。そこで私は現在国際高校が取り入れている「グローバル探究」や「ディベート」の授業をうまく活用できれば、学生のアウトプット能力「能動的スタイル」を変化できる可能性があると考えた。例えば授業の初めに先生が生徒たちに一つの問題を投げかけ、1時間かけてその問題の背景、解決策などを「先生の介入なく、生徒たちだけ」で思考する。これらを通し、インプット、アウトプット能力を同時に鍛えられる。また授業を通し様々な問題に対し興味をもつきっかけにもなるのではないか。

4. おわりに

私は日本の教育方針のインプットも何かを学ぶ上でとても大切なことだと思うが、インプットに対するアウトプットに欠けていると考えた。そのためカナダで学んだ「能動的な姿勢」の重要性をこれからも続け、伝えたいと思った。